

「余程」の使い分けと使用人物の差

——「矢張り」を比較対象に——

阿久津 千 明

日本文学ノート
第四十六号

はじめに

私が「余程」を課題研究のテーマとして選択した理由は、二年生の時に受けた日本語学演習Ⅰの授業がきっかけである。授業の課題で式亭三馬の『浮世床』の作中にある「余程」について調査し、レポートを作成した。この時、辞書を用いることから分かる語の派生時期や、意味・表記の変化に深い関心を抱いたのである。調査の過程で新たな疑問が生まれたのだが、当時は解決できないうちに終わってしまったので、この課題研究で取り組もうと試みたのである。

調査開始当初は二つの疑問点について調べていたが、最終的に「よほど」と「よっぽど」の二通りの読み方に話者の違いがみられるか、という点に絞って調査を進めることとした。調査はまずジャンルや年代も定めず漠然と文献を集めることから始めたのだが、松井栄一氏の「近代口語文における程度副詞の消長^(注1)」より、明治以降という限られた期間においても様々な動きがあること知り、私は江戸と明治以降を中心に調査を見直すことにした。

調査を行うにあたり、比較対象として「矢張り」を取り上げた。二年時のレポートで「余程」は「よっぽど」から「よほど」に変化したことが分かった。一方、「矢張り」は「やはり」が変化して「やっぱり」が派生している。私は調査を行うまで「余程」が「良き程」の変化した語であることを知らず、「よほど」が促音化することで「よっぽど」に至ったものだと思っていた。恐らく、現代人の多くがそのように思っているのではないかと思う。「良き程」が変化して生まれた「よっぽど」という意識が薄れ、単純に「よほど」の強調形という認識に移り変わっていくにはどのような過程があったのか、元より強調形として派生した「やっぱり」を例にとり、二つの語の話者について考察することでその差を言及しながら考察していきたい。

調査は会話文における使用状況を見たいことから小説を資料とした。話者については話し手と聞き手の性別、年齢等をまとめる。以上の形式を用い、時代の流れに沿って進めていく。なお、「余程」は下に助詞「に・な」の付属する語もあるが、「矢張り」には助詞を伴う使用が見られなかったため、本論文では調査の対象には含めないものとした。

第1章 「余程」について

1-1 「よほど」と「よっぽど」の比較

取り上げる資料であるが、「余程」という当て字がされるようになった江戸時代以降、主に明治・大正時代の小説を中心に取り上げた。

江戸時代は「相当」の意味が根強く定着してきた中期前後から取り上げ、作品は庶民に需要が高かった近松門左衛門の浄瑠璃や式亭三馬の滑稽本を中心とした。『浮世風呂』は索引のある文献が見つからなかったため、自力で数えたことで見落としの可能性を拭いきれないが、大きな誤差はないものとして取り上げた。

年代	作品名	作者
1694	好色伝受	小嶋 彦十郎
1703	曾根崎心中	近松 門左衛門
1707	丹波与作待夜のこむろぶし／堀川波鼓	〃
1711	冥途の飛脚	〃
1712	夕霧阿波鳴渡	〃
1717	鍵の権三重帷子	〃
1721	女殺油地獄	〃
1722	心中宵庚申	〃
1809-13	浮世風呂	式亭 三馬
1813-23	浮世床	〃

明治以降の作品は初期の作品も取り上げたのだが、索引のある文献を探すことができず、中期以降の文献に留まった。上記の『浮世風呂』同様『多

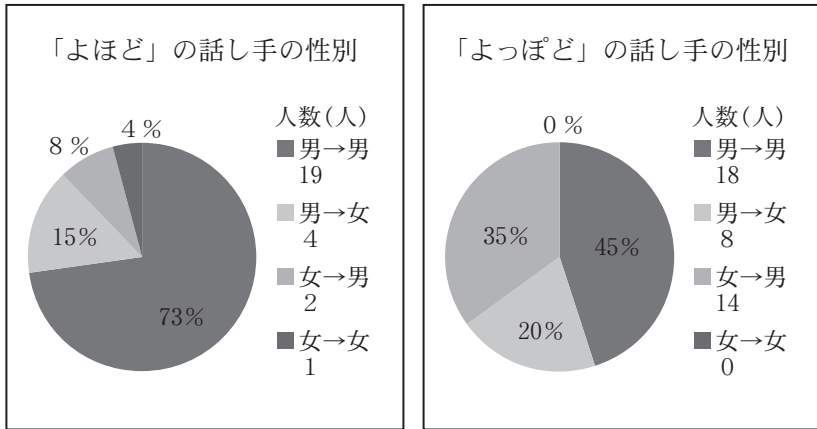
情多恨』は自力で数えたことで誤差が生じている可能性があるが、参考までに取り上げた。

年代	作品名	作者
明治28-29	たけくらべ	樋口 一葉
29	多情多恨	尾崎 紅葉
43	青年	森 鷗外
大正元	正義派	志賀 直哉
”	彼岸過迄	夏目 漱石
5	明暗	”
6	戯作三昧	芥川 龍之介
”	和解	志賀 直哉
”	キタ・セクスアリス	森 鷗外
8	蜜柑	芥川 龍之介
9	秋	”
10	暗夜行路	志賀 直哉
昭和2	或阿呆の一生／蜃気楼／歯車	芥川 龍之介
11	彼は昔の彼ならず	太宰 治
12	ダス・ゲマイネ	”
23	人間失格	”

1-1-1 性別

まず性別によってどのような違いがあるのか見ていきたい。話し手と聞き手の性別をそれぞれ調査すると、江戸では「よほど」の使用が男性から男性のみに限られることがわかった。元より使用数^(註2)が少ないことも関係しているだろうが、女性の話し手どころか男性から女性に対しての使用もないことから、「よほど」は男性同士でのみ使用可能な硬い表現であるといえる。「よつぽど」^(註3)も話し手が男性である割合が7割を超えるものの、女性の話し手の登場は大きな違いである。依然として男性的ではあるが、「よほど」に比べると「よつぽど」は女性も使用する少し砕けた表現であると考えられる。

明治以降は使用例が多いため、以下にグラフとして示しておきたい。



「よほど」は話し手が男性である割合が9割近くある。江戸と比較すれば女性の話し手もいるが、女性から女性への使用がわずか4%に留まり、依然として男性的な言葉であるといえる。「よっぽど」は江戸時代では少なかった女性の話し手が増加した。聞き手が男性である割合は高いが、取り上げた作品の登場人物の多くが男性であることを考慮すると、当然の結果だともいえる。

「よほど」は江戸時代からさほど変わらず男性的な硬い表現として認識される一方、「よっぽど」は時代の流れとともに女性の話し手が増加し、性別差がなくなり幅広く使用される表現となっていくと考えられる。

1-1-2 年齢

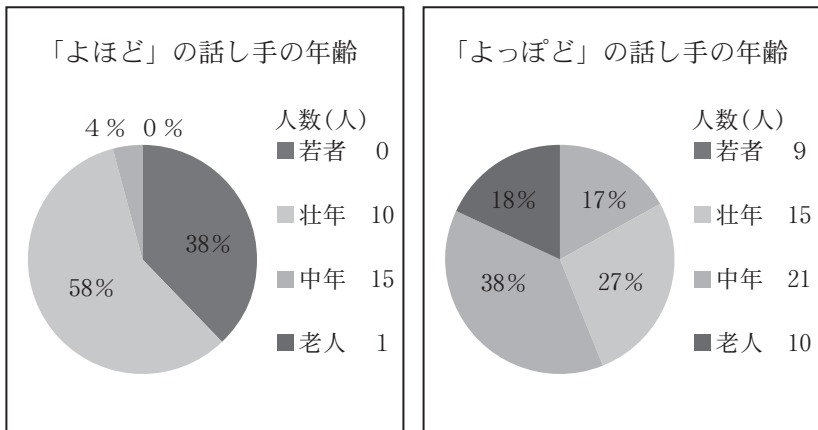
話し手の年齢がどのような割合となっているか「若者（19歳以下）、壮年（20～29歳）、中年（30～59歳）、老人（60歳以上）」として調査した。しかし、文献中に年齢が書かれていないことが多々あり、把握することは大変困難であった。そのため私の判断が誤差を生じさせている可能性があるが、大筋の年齢層は掴めるはずである。

まず江戸の「よほど」の話し手を年齢別に分けると若者と壮年の使用がなく、中年と老人が話し手の主体となっている。中年とはいえ、当時の平均寿命を考えれば30歳から60歳未満は高年ともいえるため、ある程度高い年齢層が使用する表現であることが分かる。「よっぽど」も若者の使用がなく中年

の話し手が主体であることは変わらないが、壮年の使用も見られ、老人の割合を上回っている。年齢層はまだ高いともいえるが、「よほど」に比べると「よっぼど」は話し手の年齢層が少し広い表現と捉えることができる。

次に聞き手の年齢によって話し手の使用の度合いが変化するか調べるため、話し手に対する聞き手の年齢について「年下、同年、年上」として調査した。江戸の話し手に対する聞き手の年齢差は「よほど」も「よっぼど」も同年への使用がほとんどであり、2割ほど年下が占めるという結果になった。「よっぼど」には僅かに年上への使用が見られるが、これは複数人との談話中に発せられたものであり、「よっぼど」が年上にも使用することがあるとは言いきれない。これと同様に、「よほど」の2割を占める年下への使用も複数人との会話中に発せられたものであることから、年下への使用が認められるとは断言できない。よって、「よっぼど」は僅かに年下の使用が見られるが、どちらも同年への使用が主軸であるということに留めておきたい。

明治以降は使用例が多いため、グラフとして以下に示しておきたい。

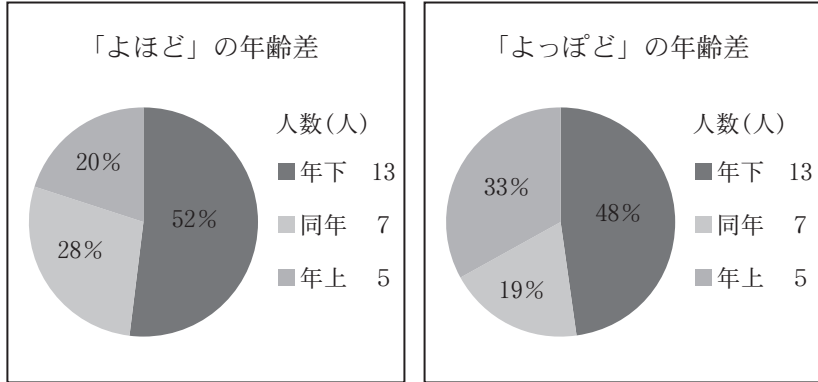


依然として「よほど」の若者の使用数は0であるが、同じく1例もなかった壮年が約4割を占めた。中年の使用数は変わらず高いままであるが、老人の使用数が減少したのである。一方「よっぼど」は主体であった中年が半減し、壮年の割合に近い形となった。また老人の割合は変わらず1割を保つ一方、「よほど」と同様に0だった若者も1割見られ、老人の話し手とほぼ同率となった。

「よほど」は江戸から高年齢層の使用が多く、明治に入って年齢層は少し広

がりを見せたが若年層までは広がらず、成人以上が使用する言葉に留まった。同じく江戸では「よほど」程ではないにしても高年層の使用が多く見られた「よっぽど」は、明治に入ると若者へも浸透し始め、年齢に関わらず使用されるようになったといえる。

次に明治以降の話し手に対する聞き手の年齢差は以下の通りである。



「よほど」も「よっぽど」も同年への使用数が高い割合を占めていた江戸時代だが、明治に入ると半数以下に激減し、年下への使用数が高割合を占めるようになったことで、項目における差が少なくなったといえる。しかし「よほど」の年下に対しての使用は聞き手の年齢よりも話し手の職業が関係しており、学者等の知識層の割合が半数近くを占めている。よって、年下の割合が高いことは事実であるが、聞き手が年下であるという要素が「よほど」を使用するに至った要因とは言い難い。同じように「よっぽど」の年上に対しての使用は話し手と聞き手の関係が影響を与えていると思われる。年上に含まれる多くの使用例が親族等の極めて親しい人物に対しての発言であり、こちらも半数以上の割合を占めている。以上のことから様々な影響を受けて得た結果ではあるが、純粋に年齢差だけから読み取ると聞き手を選ばず広く使用されたといえる。

第2章 「余程」と「矢張り」の比較

第1章では基本的に「よほど」と「よっぽど」片方だけの使用者と両方を

使用する人物の区別なく全体的に述べてきた。しかし、片方のみを使用する人物の存在が会話文の比率において影響を与えている可能性がある。いずれにしても両方使用する人物は聞き手によって使い分けをし、片方のみを使用する人物はどちらを使用しているかによって人物差が生まれていることは確かである。江戸では登場人物全員が片方のみを使用しているため、明治以降に限り片方のみを使用する人物について分けたものも交えながら、「余程」と「矢張り」の使用者の特徴を掴むことで「良い程」としての認識があるのか考察していきたい。

2-1 「矢張り」について

「余程」と比較するにあたり、第1章同様に「矢張り」の性別と年齢に関して述べておきたい。

まず性別についてであるが、江戸では「やはり」は男性の話し手が多い中、「やっぱり」は男女半数という結果に至った。明治以降になると「やはり」は男性の話し手がさらに増加し、ますます男性的な言葉となっていった。「やっぱり」も同様に男性の話し手が増えたが、これは男性から女性への使用が増加したためであり、性別差がなくなっていったと捉えるべきだろう。

次に年齢に関しては、江戸では「やはり」の話し手は主に中年と老人で、聞き手は年下と同年が多くを占めた。一方「やっぱり」は壮年から老人まで使用し、聞き手は同年がほとんどである。明治以降になると「やはり」は壮年の使用が見られるようになり、聞き手は同年と年上が占めるようになった。「やっぱり」は世代を通して使用されるようになり、聞き手の年齢にも左右されず、広く一般的な言葉として確立していったようである。

2-2-1 性別

初めに性別について比較してみると、「よほど」と「やはり」は江戸も明治以降も一貫して話し手は男性が多くを占めている。江戸では女性の例がない「よほど」に比べれば「やはり」は女性の話し手が2人いるが、聞き手が同性であり、明治に入ると聞き手が男性に変わって改まった挨拶や他の男性の受け売りとしての使用が多く、女性から広まったとは考え難い。「よほど」は明治に入って女性の話し手が増加したが、男性に対しての使用が多く、同性間での使用も1例みられるが深刻な話の最中で使用されている。片方のみ

を使用する人物と比較してみると、「よほど」も「やはり」もおおよそ大正時代を境に両方使用する人物、特に男性が減少していくものの、全体的な女性の使用数が少ないため女性の使用率が増加することもなく、主に男性が使用する表現であったといえる。

一方「よっぽど」と「やっぱり」では、「やっぱり」が江戸ではすでに男女半数の使用となっているが、「よっぽど」は江戸では男性が多く、明治に入ってやっと女性の話し手が増加している。片方のみを使用する人物は僅かばかり男性の方が多いものの、ほとんど差はみられない。第1章で「よほど」と比較していたときは明治に入って女性の使用が増加したことで性別による使い分けが少なくなっていくと考えられた。しかし「やっぱり」と比較すると「よっぽど」は江戸では町人の中で流行したが女性にはさほど浸透せず、明治になって女性から男性への使用が増加したことで、「やっぱり」と同様に男性も女性に抵抗なく使用するようになっていったのだと思われる。「やっぱり」に比べて「よっぽど」が性別に関係なく使用されるようになるのが遅いのは、江戸では「よっぽど」の原形が「良い程」であったという認識がまだ存在していたからだと考えられる。当初は「よほど」よりも正式な表現であるという意識の下で使用していたが、明治以降は本来の「良い程」という意味で使用されることが少なくなっていく。そのため「やっぱり」が「やはり」の促音化した語であるように「よっぽど」は「よほど」が促音化した語であるという誤った認識が広がり、女性が話し言葉として多く使用するようになっていったのであろう。

2-2-2 年齢

次に年齢について比較してみると、「よほど」も「やはり」も江戸では中年と老人が使用し、明治に入ると「よほど」は老人の使用が減るものの、壮年も使用するようになる。「よほど」の江戸の聞き手はほとんど同年代で使用されていたことから、世代の近い相手同士で使用されていた言葉を年下や年上にも使用するようになり、明治以降では年下の聞き手への使用が増加した結果、壮年も使用するようになっていったのだろう。

それに対して「やはり」の江戸の聞き手は同年代の使用も「よほど」と同様に高い使用率を獲得しているが、同じく年下への使用率も高く、それを表すように話し手にも僅かに壮年の存在が認められる。明治以降になると僅か

しかいなかった壮年が中年とさほど変わらないまでに使用数が増加していき、「よほど」と同じような動きをみせているといえる。また、江戸では使用数の多かった老人が明治以降では減少していることはどちらにも共通しているが、「よほど」は同年、「やはり」は同年に加え年下への使用率が若干減少し、年上への使用が増加していることから、明治以降に入ると聞き手によって使用する意識が変化していったと考えられる。聞き手が年下の場合には話し手は自分が年上であるという年長者としての威厳を誇示するための格式ある表現として使用し、年上の場合には敬意を表す丁寧語として使用しているようである。なお、同年の場合には話し手が知識層であることが多く、身分好んで使用している節があり、「よほど」と「やはり」のみを使用する人物が多く含まれている。以上のことから広がり方はおおそ同じ手段をとっているが、「やはり」は江戸から年齢層が広がっていく兆しをみせていたのに対し、「よほど」は完全に明治以降になってから広がっていったことから、年齢層は若干遅れて広まっていったといえる。この僅かな差が「よっぽど」の後に生まれた語であることが影響した可能性もあるだろう。

一方「よっぽど」と「やっぱり」は、どちらも江戸では壮年から老人まで使用し、明治以降では年齢に関係なく全世代に渡って使用されるようになっていく。先程挙げた「よほど」と「やはり」は江戸では壮年の使用が圧倒的に少なかったことに比べると、促音化した語は高年層よりも若年層の使用が多くみられ、若者から中年へと使用層の広がりをみせていったと思われる。聞き手は「やっぱり」が同年と僅かな年上のみ使用しているのに対し、「よっぽど」は年上よりも年下への使用が半数近くを占めている。若年層から広がっていったとなると、老人の使用率が高い「やっぱり」の方が若干広がり方が早いとも捉えられるが、江戸では共に年上への使用は1割を切るほどに少ないことから目上の人物には使用し難い表現であったといえる。そのような中で年長者から年下に対しても使用されている「よっぽど」は徐々に話し手と聞き手が入れ替わっても互いに使用されるようになる。年上に対して使用すると失礼に当たるといった認識が薄れるとともに、明治以降では年下と年上への使用率が増加し、聞き手の年齢に関わらず一般的に使用できる表現として確立していったようである。「よほど」と「やはり」は高年層の使用率が高いことは先に述べた通りであるが、その割には片方のみを使用する人物においては老人が少なく、「よほど」は1人、「やはり」は4人という中、促

音化した2語は「よっぽど」が10人、「やっぱり」が11人とかなり多い。促音化した語からみると平靜的な表現である「よほど」と「やはり」は老人にこそ好まれる傾向があると思うところだが、多用するには堅苦しいところもあり、老人も促音化した語の方へと流れていったのだろう。

以上のことから年齢層の広がりほぼ同時期であったが、広がりを見せるに至る一般的に使用できるという認識が確立されたのは「やっぱり」よりも「よっぽど」の方が僅かに早かったといえる。「よほど」が「やはり」に比べて遅れて広がっていったことから、江戸では「やはり」と同様に「よっぽど」が派生するものとなっているという意識が水面下にあったと捉えられる。

2-2-3 まとめ

性別と年齢についてみてきた結果、江戸時代に限り「良い程」としての認識の片鱗がみられた。また、二つの項目は職業や話し手と聞き手の関係、会話状況等様々な要素に影響されながらはじき出された数値のため、性別と年齢以外の要素に限らず「良い程」としての認識が残っていたといえる。

江戸では「良い程」という意味での使用もまだみられ、「よほど」も「よっぽど」も平仮名表記が多かった。一方明治以降になると「良い程」の意味で使用されることがほとんどなくなったことに加え、「よほど」を「余程」と漢字で表記されることが増えた。それにともない「よっぽど」を「余っ程」と表記するようになり、ここからさらに「よっぽど」が「よほど」の促音化した語であるという誤認が広がっていく。さらに昭和になると多くが「よっぽど」と再び平仮名表記に戻されたことで、誤認が正当化されていったのであろう。

おわりに

現在では「余程」がかつて「良い程」であったという認識のある人は少ないが、いつ頃から「良い程」という本来の意味が通用しなくなっていったのかを明らかにするために本論文を書き始めた。「余」という漢字が当てられた江戸時代では微かに認識はあったが、明治以降では「よほど」の促音化した語であるという認識に移り変わっていったという結果に至った。

今回は明治以降の資料を中心に取上げたが、幕末から明治初期という時代が大きく変化していった時期の作品を取上げることができなかつたため、「良い程」の認識が消失していく様子を見ることができなかつた。同様に「良い程」の認識が根強かつたと思われる室町後期から江戸初期の資料を取り入れていけば、さらに明確なデータがとれただろう。時間的な問題から資料不足は目に見えて明らかであるが、扱う資料の種類に配慮する必要があつたように思う。江戸時代の資料は滑稽本や浄瑠璃を中心としたことで侍や大官といった高官の人物が少なかつたため、身分の高い人物が使用したか判断できなかつた。その他資料の多くは正確な使用数を得ることと時間短縮のために語彙の索引のあるものを多く取上げたが、深く読み込むことができなかったことで人物像に対する正確さが欠けてしまい、数値に影響を与えている可能性が否めないことは大変残念である。

注

- (1) 「近代口語文における程度副詞の消長—程度の甚だしさと表わす場合」
（『国語学と国語史 松村明教授還暦記念』明治書院 1977年）
- (2) 江戸時代における「よほど」の全使用数は4例。
- (3) 江戸時代における「よっぽど」の全使用数は17例。そのうち男性が13例、女性が4例。